髪

菅田　忠志

あゝ！　時間がない。遅刻しそう…。

せわしい朝の時間に、厄介な髪の機嫌とりから一日が始まる。硬い髪は寝癖の悪いことも手伝って、朝の目覚めどきの髪形はひどいものだ。

まるで電気いすにでも座らせられたか、落雷にでもあったように天に向かってそそり立っているときや、帽子のひさしのように前に張り出したときなど、洗面台の鏡に映る姿にいつもため息が出た。

若い頃には、まだ家庭用のヘアドライヤーのような便利なものはなかったし、ムースのような整髪剤もなかったため、逆立った髪は本当に始末が悪かった。

寒い冬の朝なんぞは、ストーブに掛けた茶びんの熱湯を洗面器に採り、蒸しタオルをつくって頭からかぶる。しかし、これとてものの十秒もすればすぐ

にさめてしまい効果なし。

仕方ないから、頭からかぶったそのタオルの両端を両手で少し持ち上げ、前かがみにストーブの上から、顔をのぞきこむようにして、上昇する熱気を抱え込み、さめるタオルを補った。

しかし、顔が熱くなる割には髪にはこたえなかった。なんともこっけいで悲惨な格好をしながらの挑戦であったことか。

硬くて多い髪に、散髪屋はいつも「手がだるくなりますわ」と苦笑いしていたが、こちらとしてはどうしようもない。「割増料金はいややで」と話を交わしながらやってもらっていた。

あるとき、散髪屋に薦められ「アイパー」なる処理をした。

薬を塗り、細い電気ゴテで根元部分から強制的に折り曲げてゆく。なるほどこれなら楽だ。毎朝なんの苦労もなくすんなりと整髪が出来た。周りの者から冷やかされた時などは、芥川竜之介の「鼻」の主人公が頭に浮かんだりした。

それでも2、3カ月は快適だったが、あまり手を加えることも好きではなかったため一度限りとした。しかし、それからが大変であった。徐々に延びてくる髪はやはり無情で、伸びた分はまっすぐに生え、その先の直角に曲げられた髪は、まるで「曲がったくぎ煮」状態となって残り半年ほどを過ごした。これも悲惨だった。

しかし、人の願望というものはわからないものである。自分のこんな髪をもてあまし、柔かい髪の持ち主をうらやんでいるというのに、あるとき、「そんな直毛の人がうらやましいわ」という職場の仲間が現れた。なるほど彼の方はかなり強度なくせ毛である。「何言うてんねん。大変なんやで」と言ったものの、彼は彼で別の形で悩まされているようだった。

凡人はどうも無いものねだりの心がひそんでいるらしい。年のせいもあってか、最近は髪もすっかり細く少なくなり、おとなしくなってきた。加齢はあちこちいろいろな現象で現れる。

悲観してもしかたがない。上手に付き合って行こう。